



Title	T. Hardyの自然描写 : "The Return of the Native"を中心として
Author(s)	上山, 政義
Citation	大阪外大英米研究. 1962, 3, p. 39-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98942
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

T. Hardy の自然描写

——“The Return of the Native”を中心として

上 山 政 義

I. 序

本稿は“*The Return of the Native*”に具現されている Thomas Hardy (1840-1928) の自然描写の特徴について論述することを、その主眼点としているのであるが、本論に入るに先立って、この作品が生れた当時の時代思潮及び Hardy の作風を概観しておくことにする。第19世紀の英国と言え、1837年から1901年まで64年間の長きに亘り在位し、名君主と謳われた Queen Victoria が王座にあって、外交及び内政の両面に飛躍的な進展を遂げ国威は隆々と全世界に高揚された時期であり、Victoria 朝は Elizabeth 朝と相並んで英国史上に燦然たる光彩を放つ真に epoch-making な時代であったのである。Hardy は主としてこの Victoria 朝の後期において、novelist として顕著な活動をしたのであって、1895年に世に問うた大作“*Jude the Obscure*”があまりにも immoral であり obscene であるとの激越な各方面からの指弾を浴びるに及び小説創作の筆を擱き、宿願であった詩作に専念することを決意するに至った。かくして第20世紀に入ってから Hardy は、poet として英国詩壇に、不世出の詩聖 Shakespeare に次ぐと評しても過大な誇張とは言えぬほどの刮目すべき役割を演じることになったのである。

さて、Hardy の作風は、一般的に Naturalism に基調をおくものとされているのではあるが、それは世界、人間を飽くまで自然法則の下にある物的なものに見做して行く立場をとる Naturalism の基本概念をそのまま字義通りに墨守するという単純なものではないことは茲に改めて言及するまでもなく周知の事柄である。斎藤勇博士は「イギリス文学史」の中で、元来 Naturalism は

Romanticism の弊を矯正し、且つ除去するのに成功を収めたものの、それ自体の弱点、短所も比較的早く露呈され、殊にそれが英国に起ったときに、大陸では既にその全盛時代ではなく、従ってその功罪も明らかになっていたのも、英国ではやがて別な形をとって現われるようになり、その傾向を示した大家が Hardy その人であったという要旨のことを述べておられる。然らば、Hardy⁽²⁾ の各作品を通じて、その底流を形成している彼の作家としての根本理念に解明を与えんとすれば、それは如何なる形態と本質を有するものと定義すべきであろうか。もとよりそれはこの時代の文芸思潮の影響と没交渉な性格を持つものではないが故に、本来ならば先づここで、Victoria 朝の文芸思潮の概略を論述すべきではあるが、彼はこの時代の文学界の最高峯的存在であり、その絶倫とも称すべき精力的創作活動により指導的役割を演じたことに思いを致すならば、ある意味では彼の創作理念の様相を論ずることが、この時代の文芸思潮の主流を述べることでありと言っても過言ではあるまい。そこで、今当時の時代思潮を予め概観することなしに、直ちに Hardy の作風の特徴について論評に入ることに致したい。

我々は先づ第一に、彼の主要作品にあっては、雄渾にして巧緻靈妙の極に達した筆致によって、濃みなく展開される物語が、汲めども尽きぬ魅力と息もつがせぬほどの迫力を以て、読者の心を感動させずにはおかぬ鮮やかな戯曲的構成と相俟って詩的情緒、牧歌的情景及び自然現象の美観という三者を、有機的関連の下に綜合統一して叙述せる秀れた自然描写の手法とにより、洋の東西、時の新旧を問わず広く文学愛好者に、津々たる興味を与えていえるという根本的事実に注目せねばならない。そこには社会各階層の随所において繰り上げられる生の営みと、赤裸々に描いた人間模様の種々相が余すところなく抉り出されているのである。従って、Hardy の麗筆がかくして生んだ各作品の基調となっている理念を単に Naturalism とか Realism とかいう一語で以て表現しようと試みることは、既述の如く、不合理且つ不自然極りない企てであり、輕率この上ない手法であることは、火を見るよりも明々白々たる事柄なのである。

ところで、Hardy の作風と一口に言っても、彼の創作活動は多年に亘っているが故に、逐次変貌を遂げていることは、容易に想像されるところであるので、ここでは研究審議の対象を本稿の主題である “The Return of the Native” の内容のみに限定して、以後所論の披瀝を進めることにする。

さて “The Return of the Native” の執筆をするに際して、Hardy の脳裡を常に去来していた基本的な主義、根本的な理念は、Victoria 朝後期の文学思潮の主流であった Naturalism を核心とするものであったと 思惟するのが妥当であろう。しかし、上述の如くに Hardy の Naturalism は所謂単純にして狹隘な範疇に限定された定義、性格を持つものとは異り、多様多彩な主義や概念、あるいはその他の要素を止揚統合して醸成された一種独特な内容を具備した Naturalism なのである。然らば、今その多様多彩と表現した主義や概念とは、一体どのような本質と属性を持ったものであろうか、先づ最初に、“The Return of the the Native” の物語の展開に際して、技法上において realistic な面が具象化されていることから Realism の要素が加わっていることは明らかである。次に、Hardy は宇宙のうちに存在してそれを支配し動かす力を意味する言葉である “Immanent Will” 即ち内在意志なるものを終始念頭に置いていたのであるが、彼には、この内在意志は、盲目的な性質を持つもので、吾人が人生行路の随所において遭遇する突発的な災難を生ぜしめ、不慮の出来事を勃発させるものであると思考されたが故に、この彼が抱いた “Im-⁽³⁾manent Will” という思想が、彼の Fatalism を、そして更には Pessimism を生み出す契機であり動因に他ならなかったのである。ところで、Fatalism と Pessimism の基盤の上に立つ人生の描写は、ややともすれば、世相の暗黒面や悲劇的様相を浮き彫りにし、読者の心をそこはかとなく陰惨と悲観の境地へ追いやる傾向を帯びるものであるが、Hardy の場合には、彼が同胞に対して、殊に純朴な農村の人々に対して抱いていた暖い Humanism の精神がその作品の隅々にまで脈々と流れることによって、暗さや夢なさを伴った人生観に

対する大きな救いの役割を果たしていることに注目せねばならない。

読者の心奥に深刻な衝撃と強烈な感銘を与える劇的構成を具備した作品という観点に立っても、Harpyの小説は比類稀な内容を持つものであるが、このことは諦観に徹すればそこに自ら悟道の境地を開拓することが可能となり、人生の掬すべき滋味を、真に鑑賞するための鍵を見出すことができるという彼の哲理に加うるに、巷間に繰り広げられる人間界の愛憎、葛藤そして業苦を赤裸々に描きつつ、読者に処生の教訓や寓意を暗示せずにはおかない迫力を持った彼の厳粛な倫理観によるのである。約言すれば、彼の作品にあっては、ethical precepts, moral admonitions, lessons of life といったものが秀れた plot-settingの中に織り込まれることによって我々の胸を薙々と打つからなのである。但し、彼の倫理観は勧善懲悪式に教訓を垂れたり、あるいは、通り一遍の単純な修身道徳を説いたりするというが如き形式によって、彼の作品の中に具象化されているのではないことは、今更付言の要が寸毫もない位明白なことであろう。

ところで、記述の順序としては最後となったが、“The Return of the Native”の鑑賞に際し、特に刮目に値する重要性を帯びた特色の一つとして、その戯曲的構成の背景となり、舞台を構成している農村の風物描写に示された他の追隨を許さぬ卓抜せる彼の手法を指摘せねばならない。即ち、この作品にあっては、戯曲的構成と環境描写とが正しく字義通り車の両輪の如くに、二者が一体となって作用することによって英文文学史上に不滅の金字塔を樹立した不朽の名作を作り上げているのである。Hardyは既述の通り“Jude the Obscure”の発表以後は詩作に専念し、詩人としてもShakespeareの劇詩以来の最大傑作の一つと評価されるNapoleon戦争に取材した長篇の一大劇詩“The Dynasts”を始めとする幾多の秀れた業績を、英国の詩壇に残していることから容易に想像される如く、彼の小説には詩的要素が濃厚に含有されている。就中、“The Return of the Native”にあっては、悠久不滅の大自然と大宇宙に対して、彼の抱いている根本的思想の中核を構成するものとも考えられるEgdon Heathの創造が、poetic beautyを持った描写と叙述によって永

劫の生命力を付与されていることを特に牢記しておかなければならない。なお Hardy 時代の農村は、都会地域の発展と繁栄に反し次第に疲弊する傾向が見られ、農村古来の伝統的美風や郷愁をそそる各種の年中行事が衰頹の兆候を示し、同時に村民の naive, simple, innocent, frank, humane といった語で形容される美質が日を逐うて喪失される有様であった。Hardy はこのような農村の状況に対して限りなき情愛の籠もった眼指しを注ぐとともに、深甚なる哀惜と同情の念を懐いていたので、彼の作品には、nostalgic emotion, tragic tone, pathetic feeling, elegiac rhythm, rural pathos, rustic sentiment, pastoral atmosphere, sympathetic touch といったものが随所に滲み出ているのである。

Ⅱ. “The Return of the Native” の冒頭箇所の試訳⁽⁴⁾

Book First The Three Women

Chapter I A face on which time makes little impression

第一篇 三人の女

第一章 幾歳経るとも変わる事なき野面

A Saturday afternoon in November
was approaching the twilight, and
the vast tract of unenclosed wild known as
Egdon Heath enbrowned itself moment by moment.
Overhead the hollow stretch of whitish cloud
shutting out the sky was a tent which
had the whole heath for its floor.

霜月は土曜日の昼下り
たそがれ時は迫り来て
エグドン・ヒースと誰も知る涯なくつづく荒れた野は
茶褐色とは化しぬ刻々と。

仰ぎ見れば虚ろな白け雲大空一面に拡がりて
人目を遮ぎる天幕とも目には映れり
ヒースのすべてを底となして。

The heaven being spread with this pallid screen
and the earth with the darkest vegetation,
their meeting-line at the horizon was clearly marked.
In such contrast the heath wore the appearance
of an instalment of night which had taken up
its place before its astronomical hour was come:
darkness had to a great extent arrived hereon,
while day stood distinct in the sky.

蒼穹は白き帳に蔽われ
下界はまこと暗黒の草木茂りて
遙か彼方に望む天地のつながりはくっきりと際立ちぬ。
明暗のけじめかく鮮かにして
暦の示す日の入りの刻まだ来ぬに
荒れ野はその場を占めし夜陰の相を呈したり：
あきらけく、ひるのあかり碧空に残れど、
夕闇早や広漠とこのあたりに降れり。

Looking upwards, a furze-cutter would have
been inclined to work; looking down,
he would have decided to finish his faggot and go home.
The distinct rims of the world and
of the firmament seemed to be a division in time
no less than a division in matter.

仰ぎて大空を見れば、なおもしだ刈らんとぞ思い、
俯して大地を見れば、そを束ねて帰らんとぞ思う。

はるかなる遠き果てに
天地のまじわるあたり
物質のけじめばかりか
時刻の区分もまた明らかに見えたり。

The face of the heath by its mere complexion
added half an hour to evening;
it could in like manner retard the dawn, sadden noon,
anticipate the frowning of storms scarcely generated,
and intensify the opacity of a moonless midnight
to a cause of shaking and dread.

野面の貌にただ一べつだに与うれば、
暮れ足を半刻も早むるばかりか、
そはまた暁を遅らせ貞昼の日輪に愁色を漂わし、
類稀なる大嵐を先触れする陰しき相にて、
月なき夜半のぬばたまの闇を深め
膚に粟を生じ身をば震わす凄みの囚を作りぬ。

Ⅲ. 本 論

“The Return of the Native” の物語が展開される 舞台となり背景となるものは、Hardy がいみじくも創造した Egdon Heath である。その Egdon Heath とは一体どのような存在であるかについては、同書の Preface の中で彼は次のように述べている。

Under the general name of ‘Egdon Heath’, which has been given to the sombre scene of the story, are united or typified Heaths of various real names, to the number of at least a dozen; these being virtually one in character and aspect, though their original unity, or partial unity, is now somewhat disguised by

intrusive strips and slices brought under the plough with varying degrees of success, or planted to woodland.

彼は更に夢想を逞しうして、次のような言葉でその Preface を結んでいる。

It is pleasant to dream that some spot in the extensive tract whose south-western quarter is here described, may be the heath of that traditionary King of Wessex—Lear.

さて、自然描写の秀れた手法の面でも令名の高い Hardy は、その各作品を通じて随所にその片鱗を見せているのであるが、就中、この小説の戯曲的構成の舞台となり、物語の進行に雄勁な色彩りを添える Egdon Heath の描写は、彼の全創作の中では勿論、英文学史上最高の庄巻と評しても、過度の誇張ではないほどの手腕の冴えを示している。今その具体的論拠を述べるならば、究極的には、poetic beauty の粋を凝らした技法で、poetic emotion を籠めてなされた描写という点に彼の真骨頂が存するわけであるが、ここではその内容を分析して精細な解明を試みたいと思う。

先づ第一に挙げられる特徴は、比喩及び対照の手法の卓抜している点であろう。

例えば、百花撩亂の相を呈した華麗な花園と永劫不変の莊嚴性を帯びた荒涼寂莫たる荒蕪地を比較すべく、前者を宮殿に、そして後者を牢獄に譬えて、こよなき対照の妙を発揮しているのである。即ち、——

The qualifications which frequently invest the façade of a prison with far more dignity than is found in the façade of a palace double its size lent to this heath a sublimity in which spots renowned for beauty of the accepted kind are utterly wanting.
(6)

また、晩秋の荒野に吹く11月の風は、人の心にそぞろ哀愁の念を掻き立てるのが常であるが、その風の調べを形容するのに、人生の旅路の果てに辿り着いた90才の老人の咽喉から絞り出される乾からびた歌声を以て譬えている。凱切な比喩、精妙な修辭法は、誠に他の追隨を許さないものと評しても過言ではあ

るまい。もし吾人が静かに臉を閉じて、次の一節を脳裡に思い浮べるならば、恰も秋既に酎の候、宵闇迫る頃に満目肅条とした幽暗模糊たる大地に佇んで、しばし草木をそよがす風の音色に傾聴しているが如き感慨を催すことも、至難の業ではないのである。

Throughout the blowing of these plaintive November winds that note bore a great resemblance to the ruins of human song which remain to the throat of fourscore and ten. It was a worn whisper, dry and papery, and it brushed so distinctly across the ear that, by the accustomed, the material minutiae in which it originated could be realized as by touch.

(7)

第二に、鋭敏な洞察力と逞しい想像力が挙げられる。この両者が融合して渾然一体となり、自然現象、自然景観についての興趣横溢せる表現を生み出し、読者に深い感動を与える一大要因を形成しているのである。私はここで本邦の古典文学の代表的作品である「源氏物語」における紫式部の自然描写の手法を Hardy のそれと比較対照して、その相違の一端を例証してみたいと思う。紫式部は「源氏物語」の冒頭を飾る「桐壺」の巻の中で、野分の頃の自然の情景を次のように叙述している。

「野分だちて俄かに膚寒き夕暮の程、常より思し出ずること多くて、鞭負の命婦というを遣はす。夕月夜のおかしき程に、出し立てさせ給うて、やがてながめおはします。」

「やもめ住みなれど、人一人の御かしづきに、とかくつくろい立てて、めやすき程にて過し給えるを、闇に昏れて伏し沈み給える程に、草も高くなり、野分にいとど荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重むぐらにもさはらずさし入りたる。」

「月は入方の空清う澄み渡れるに、風いと涼しく吹きて、叢の虫の声々もよおし顔なるも、いと立ち離れにくき草のもとなり。」

さて、上に引用した文は何れも格調の高い美文であることに疑問を挟む余地

は微塵もないのであるが、Hardy の技法に比して、洞察力及び想像力に関する限りでは一步を譲るものとは言えないであろうか。いささか奇異な感を与える表現法ではあるが、私は「源氏物語」の自然描写は直線的であるに反し、“The Return of the Native”のそれは曲線的であるが故に、前者が読者に与える感銘、印象はどちらかと言えば、temporary で superficial なのである一方、後者のそれは、lasting で profound なものとなっていると判断するのである。このことは次の Egdon Heath を吹き渡る秋風の奏でる独特な調べが生じる過程の叙述に如実に示現されている。

It was the united products of infinitesimal vegetable causes, and these were neither stems, leaves, fruit, blades, prickles, lichen, nor moss. They were the mummied heath-bells of the past summer, originally tender and purple, now washed colourless by Michaelmas rains, and dried to dead skins by October suns. So low was an individual sound from these that a combination of hundreds only just emerged from silence, and the myriads of the whole declivity reached the woman's ear but as a shrivelled and intermittent recitative. Yet scarcely a single accent among the many afloat to-night could have such a power to impress a listener with thoughts of its origin. One inwardly saw the infinity of those combined multitudes; and perceived that each of the tiny trumpets was seized on, entered, scoured and emerged from by the wind as thoroughly as if it were as vast as a crater.

(8)

上に引用した一節は、全体が有機的関連を保ち、総合的に統一されて、過ぎ去りし夏に日干しになったあの heath の壺花が、無数に存在する荒蕪地を吹き通るときに、晩秋の風が生ずる一種の名状し難い音調をいみじくも鮮かに描出している。就中、One inwardly saw で始まる最後の文はその叙述の手並みの見事さに驚嘆せぬ人はあるまい。行を追うて読み進むにつれて、恰も広大な火山の噴火口であるかの如くに、ラッパ形の花の一つ一つの内部にまで吹きまくる秋風の動きが、我々の心眼にまざまざと映る思いがするのである。真に大文

豪の面目を躍如として示すものとして、少々長きに失する嫌いのある引用を試みた所以も実にここに存するのである。ところで、この鮮かな描写は、それに続く “The spirit moved them.” という簡潔な一文によって白眉の手法の極地に到達する。この文を構成する語数は僅々四に過ぎないのではあるが、如何に多数の語を用いるとも、表現することが至難と思われる霊妙感を読者の胸に響かせずにはおかぬのである。Hardy はもし聴き手が感情豊かで、fetishistic mood の持ち主であれば、もう一段と霊感に富んだ秀句を生んだであろうと述べているが、それは Hardy の謙虚な心境を示す言葉に過ぎないのであって、よしんば物霊崇拜的な気持ちが心中にあらうとも、これに優る表現は先づ不可能であると断じても軽率の謗りを受けることはあるまい。

第三の特徴として、自然に生命力を吹き込む手法ということを指摘せねばならない。一塊の土壌、一本の草木と雖ども、血肉を具えたものであるかの様に読者の心に迫ってくるという点で、Hardy の右に出る作家は極めて稀れであろう。空に漂う一片の白雲、谷間を流れる小川のせせらぎの如きものさえ、さながら生あるものの様相を帯びて描かれることによって、物語の展開に一入迫力を与えるのに貢献しているのである。また、Hardy が personification の技巧に秀れていることが、彼のこの特色に錦上添花を添え、画竜に点睛を加える役割を演じているのを無視することはできない。このことは次に示す例文によっても明らかである。

The spot was, indeed, a near relation of night, and when night showed itself an apparent tendency to gravitate together could be perceived in its shades and the scene. The sombre stretch of rounds and hollows seemed to rise and meet the evening gloom in pure sympathy, the heath exhaling darkness as rapidly as the heavens precipitated. And so the obscurity in the air and the obscurity in the land closed together in the black fraternization towards which each advanced half-way.

(9)

夕闇が迫り来て暮色が漸く濃くなるとき、天界より粛々として降りてくる夜陰という魔物が、その近親である太古の原始時代さながらの不気味さを装った Egdon Heath という闇を吐き出す怪物によって迎えられ、両者相携えて奇怪なる亡霊や妖精が跳梁するにふさわしい荒野の夜を作り出すのである。上の引用文を鑑賞味読すれば、正にその情景が眼前に髣髴として浮びはしないであろうか。次にこの特徴を示すもう一つの実例を掲げることとする。

But the thick obscurity permitted only sky-lines to be visible of any scene at present. The water at the back of the house could be heard, idly spinning whirlpools in its creep between the rows of dry feather-headed reeds which formed a stockade along each bank. Their presence was denoted by sounds as of a congregation praying humbly, produced by their rubbing against each other in the slow wind.

(10)

上の文では、静かで深い川が幾列にも並んだ枯れ穂をつけた葦の間をくぐって、小さい渦巻を紡ぎつつ流れるときに立てる音が、迫真の力をもって読む人の耳朶を打つことであろう。sky-line 以外には何の景観も見分けられない暗闇の中で、川原に葦が生育していることを人に感知させる現象の叙述を見れば、自然が Hardy の筆によって如何に豊かな生命力を与えられているかという事実の一端が伺えるのである。ゆるやかに吹く川風が起す葦の葉ずれが生じる音を、謙虚に祈りを捧げる教会の会衆の口から自づと流れ出るつぶやきの如き声に譬えるという生気溢れる描写の鮮かな技法に対して、読者の口から思わず賛嘆の叫びが洩れるに違いない。

第四に、表現及び描写の巧緻ということがげられる。先づ Book First Chapter III The Custom of the Country の中で、篝火祭の行事の情景を叙した箇所を次に掲げてみよう。

They were the bonfires of other parishes and hamlets that were engaged in the same sort of commemoration. Some were distant, and stood in a dense atmosphere, so that bundles of pale strawlike

beams radiated around them in the shape of a fan. Some were large and near, glowing scarlet-red from the shade, like wounds in a black hide. Some were Maenades, with winy faces and blown hair. These tintured the silent bosom of the clouds above them and lit up their ephemeral caves, which seemed thenceforth to become scalding caldrons.

(11)

上の文では、篝火の巧緻この上ない描写の技法が随所に見受けられる。遠方の濃厚な夜の大気の中にある篝火は幾束もの蒼白い蕈状の光線が、扇形をなしてその周囲に輝いており、他方近くの篝火は漆黒の獣皮にぽっかりと口をあけた傷のように暗闇から深紅色に光っていたという表現は、遠近法の粋を凝らした一幅の名画を眺めているが如き感懷を読者に与えるであろう。殊に闇空を真紅色に染める篝火を、野獣の傷口から流出する血潮に譬えた叙述は、物凄く不気味な篝火の情状を迫真力を以て形容したものであり、また燃え上った篝火が頭上に浮ぶ雲を紅に染めて、はかない洞穴を照らし出すと、それが焦熱せる大釜と化したという描写は、深更の刻に夜空を焦がして燃え上る火事を目撃しているような戦慄を読者の心底に与える悽慘さを行間に滲ませているのである。次に、もう一つの例文を示すことにしよう。

It was as if the bonfire-makers were standing in some radiant upper storey of the world, detached from and independent of the dark stretches below. The heath down there was now a vast abyss, and no longer a continuation of what they stood on ; for their eyes, adapted to the blaze, could see nothing of the deeps beyond its influence.

(12)

篝火を焚いている人達の身邊が如何に明るかったか、そしてそれに反して光の届かない荒野一帯がどのように暗かったか、その明暗の顕著な対照をいみじくも浮彫りにしたのが上の叙述である。前者を燦然たる輝きを放つ地球の二階に譬え、後者を広漠たる深淵に擬えた手法の卓抜さは誠に言語に絶するもので

ある。なお、以上に述べた表現及び描写の巧緻については、第一から第三までに列挙した特色を綜合したものとも考えられるものであることを付言しておきたい。

さて、今まで実例を示しつつ、Hardy の自然描写の手法の特色を論述してきたのであるが、終始一貫してその長所美点を賞揚するに止まり、短所欠点を抉出指摘して、論評を加えるということが全然行われていない嫌いがある。この事は裏を返して言うならば、類稀れな秀作であるが故に、批判の余地を殆んど残していないことを示すことにもなるのである。然し、如何なる作品にも完全無欠ということは先づ考えられないのであるから、斯くすれば尚は一層良かったであろうという望蜀的な見解を述べることにする。凡そ自然景観には陽の面と陰の面という相反する二つの様相の存在を見分けることが可能なわけであるが、Hardy の自然描写は陰の面を強調するあまり陽の面を軽視した傾向があるのではなかろうか。勿論、Egdon Heath は既述の如くに、荒涼寂莫とした陰鬱な相貌と峻厳襟を正さしめる千古不変の孤高さを保っているのであるから、陰の面に重点が置かれることは理の当然である。然し、我々はここで「光明には陰影が添うて更にその輝きを増す。」という諺を想起する必要がある。例えば、宵闇迫る黄昏ときには、大空は嵐の前触れの如き冥々とした幽暗模糊たる暮色を野趣横溢せる荒蕪地に投じるのであるが、早朝や白昼などには、美しい碧空が仰ぎ見る人の心に希望を与える様に微笑みかける時もあるに違いない。そのような情景が Hardy の巧緻を極めた筆で叙述されていたならば、夕空の描写が一段と生きたものとなったと思われる。このことは、万目粛条と形容される Egdon Heath にも絢爛華美な花野となる季節があることは、次に示す Book Four The Closed Door Chapter I The Recounter by the Pool の劈頭の一節を見れば明らかであり、またこの箇所を読むことによって、荒野の陰の面が一段と鮮かに浮彫りにされ、我々の胸に更に強烈な感銘、印象を与えるということから考えても疑念を挟む余地がないであろう。

The July sun shone over Egdon and fired its crimson heather

to scarlet. It was the one season of the year and the one weather of the season, in which the heath was gorgeous. This flowering period represented the second or noontide division in the cycle of those superficial changes which alone were possible here ; it followed the green or young-fern period, representing the morn, and preceded the brown period, when the heath-bells and ferns would wear the russet tinges of evening; to be in turn displaced by the dark hue of the winter period, representing night.

(13)

- ① 斉藤勇編「世界文学辞典」(研究社) p. 425より引用。
- ② 斉藤勇著「イギリス文学史」(研究社) p. 447より引用。
- ③ 斉藤勇著「イギリス文学史」(研究社) p. 448の示教に負うところが大きい。
- ④ 大沢衛訳「帰郷」(三笠書房) p. 3の示教に負うところが大きい。
- ⑤ 大沢衛著「ハーディ文学の研究」(研究社) p. 76 ~ p. 107 の示教に負うところが大きい。

以下は Macmillan 版 “The Return of the Native” の頁数を示す。

- ⑥ p.5 ⑦ p.62 ⑧ p.63 ⑨ p.4 ⑩ p.48 ⑪ p.17 ⑫ p.18 ⑬ p.295